

いかに学生が英語学習意欲を取り戻すか 日本人学生へのアンケート調査を基に

How Students Regain their Willingness to Study English: Based on a Questionnaire Survey of Japanese Students

文学研究科英文学専攻後期課程在学

平 松 理 沙

Risa Hiramatsu

Several investigations have explored the processes of Japanese undergraduates regaining their willingness to study English. Remotivation is the process of regaining willingness to learn English. Nevertheless, earlier researchers have targeted only one student (Kominato, 2019; Mitsugi, 2019; Mitsugi, 2020). Thus, this study targeted added number of Japanese undergraduates. The author assessed their thoughts about what is needed for Japanese undergraduates to regain their drive to learn English. Until now, only Akay (2017) has analyzed students' perspectives about how teachers should instruct English to facilitate students' remotivation. Therefore, this investigation probed into undergraduates' views on what professors should do to facilitate remotivation. In total, 47 students who have regained their motivation to learn English answered a survey. The questionnaire encompassed two open-ended questions as follows: (a) What do you think students should do to regain their impetus to study English? (b) What do you think professors should do to help students regain their eagerness to learn English? The responses to the open-ended questions were analyzed using Keyword Analysis. One student claimed that professors should continue encouraging students and believe that their English skills will improve. Two students suggested that students should regain confidence in their English proficiencies. They need to regain confidence through small steps; for instance, memorizing English words. Previous studies have not inquired into students' views on what is needed for regaining motivation to learn English (Kominato, 2019; Mitsugi, 2020). This study will evaluate students' interpretations about what is requisite for Japanese undergraduates to regain their will to learn English.

I. はじめに

学習者が英語学習意欲を失くす原因について、様々な調査が実施された (Agawa & Ueda, 2013;

Sakai & Kikuchi, 2009)。学生は英語学習意欲を取り戻すために、英語学習意欲減退を乗り越える必要がある。英語学習意欲減退とは、外発的要因と内発的要因により英語学習意欲が下がった状態を指す。内発的要因として挙げられるのは、学習者の興味の欠如や基礎的な英語力の不足である (Kikuchi, 2015)。外発的要因の例として挙げられるのは、教員 (教員の性格と指導力) や指導方法 (文法と単語の暗記を重視した授業) である (Han, Takkaç-Tulgar, & Aybirdi, 2019)。本研究では、英語学習意欲を取り戻すために必要なことが何だと考えているかに関する日本人大学生の意見を分析する。

学生が英語学習意欲を取り戻した過程に関して分析した研究は複数ある (Carpenter, Falout, Fukuda, Trovela, & Murphey, 2009)。先行研究によると、学習の早い段階で学校での英語学習に対する適応力を習得することで、学習者は長期的な自信と英語力を持てるようになる (Falout, 2012)。自分自身に対する評価が高い学習者は、他者にサポートを求めることにより英語学習意欲を取り戻した。新たな要因を明らかにするために、本調査では英語学習意欲を取り戻すために必要なことが何だと思うかに関し、学生の意見を調査する。

II. 先行研究

1. 日本人の大学生が英語学習意欲を取り戻した要因とプロセス

本節では、学生が英語学習意欲を取り戻した過程についての先行研究を扱う。小湊 (2019)は英語学習意欲が低下していた習熟度下位レベルの日本人の大学生がどのように意欲を取り戻したのか探った。彼女は1名の工学系の私立大学2年生の女子学生 (学生A) を対象とした。学生Aは2年間英語の授業の単位を認定されなかった後に、意欲を取り戻した。英語の授業の期末テストが終わった翌日に、半構造化面接を50分実施した。学生Aは、勉強を親切に教えてくれた友人の存在により、意欲を取り戻せたという結果が出ている。これにより、効率的な学習方法を身につけ、分からない部分を解消できた。このことが、自己効力感の向上と分からないことがある自分を認めることに繋がった。

Carpenter, Falout, Fukuda, Trovela, & Murphey (2009)は、学生が意図せずに意欲を取り戻した場合と意図して意欲を取り戻した場合の道筋を分析した。学生が意図せずに英語学習意欲を取り戻した方法としては、実用的なマスメディアに触れたことと勉強方法を変更したことが挙げられる。英語母語話者の外国人と話したことならびに友人と良い影響を与え合ったり競ったりしたことも要因となっていた。学生が意識して英語学習意欲を取り戻した方法としては、英語の重要性に関して考えたことが挙げられる。英語が自分の将来や日常生活でどのように役立つか考えることで、意欲を取り戻した。さらに、教員にサポートをお願いしたことも要因となっていた (Falout, 2012)。

岩本 (2010)は日本人の大学生の英語学習の継続要因が何であるかを調査した。日本の首都圏にある中規模の大学で勉強している4名の学生が参加した。学習継続のためのモチベーションを向上させる要因として、「成功体験」「自己効力感」「学習支援者の存在」が極めて重要な役割を果たしているという知見が得られた。教員やクラスメートに対して持つ安心感と連帯感は、学年の初めに教室での勉強

いかに学生が英語学習意欲を取り戻すか：日本人学生へのアンケート調査を基に

を始めたばかりの学生のモチベーション維持に非常に役立つ。

三ツ木 (2019)は1名の私立大学の大学3年生(学生Y)の英語学習意欲の変容過程に影響を及ぼした要因が何であるか調べた。インタビューは一番モチベーションの向上が顕著な時期に2度行われた。その結果、「学習意欲が高い他者がいること」「改善点を明確に指摘する教員のアドバイス」が意欲向上に影響した要因であることが明らかになった。三ツ木 (2020)も、英語の教職課程を履修している1名の大学生(学生A)の英語学習意欲の減退と回復の過程を分析した。インタビューは6度行われた。

「自分の英語力不足により、悔しいと思う経験をする」「成長の実感」「他者から受けた刺激」が意欲回復の大きな要因になっているという結果が出た。

2. 生徒と学生が英語学習意欲を取り戻した要因や方法についての海外の研究

Y.T. Kim & M. Kim (2017)の調査では、上級の英語力を有する韓国人の高校生が英語学習意欲を取り戻した方法に関して調べている。彼らは130名の高校生に質問紙を配布した。この研究では、次のような方法や要因で英語学習意欲を取り戻したことがあるという知見が出ている：(1)関心がある英語のメディアを視聴する、(2)英語学習方法を変える、(3)過去に英語の勉強に興味があったことを思い出す、(4)クラスメートからのプレッシャーおよび(5)教員の影響(英語母語話者の教員と話したこと)。

Jung (2011)は韓国人の大学生がなぜ英語学習意欲を取り戻したのかについて分析した。125名の学生が大学に入学する前の英語学習経験を振り返り、質問紙に回答した。その結果、次の理由が明らかになった：(a)英語力を伸ばしたいという目標を持っていたこと、(b)英語の重要性を認識していたこと。Song & Kim (2017)は韓国人の高校生が英語学習意欲を取り戻した要因について探った。質問紙で英語学習意欲が変化した要因について質問した。その結果、クラスメートの激励と勉強方法の変更が外的要因として明らかになった。内的要因としては、成功を体験したことならびに英語圏の国の文化に関心を持ったことが挙げられる。

Akay (2017)は「生徒が英語学習意欲を取り戻すために、教員がどのような授業をするべきか」について、トルコ人の高校生の意見を分析した。その結果、(a)楽しい授業を実施すること(b)スピーキング力を伸ばすことに集中するべき(c)視聴覚教材を使うことという意見が寄せられた。

III. 問題の所在

先行研究では、学習者が英語学習意欲を取り戻した要因について調査が行われた。韓国では、Jung(2011)や Song&Kim(2017)が、学習者が英語学習意欲を取り戻した理由に関して調べた。しかし、日本でこのような調査を実施した研究者は少ない。小湊(2019)や三ツ木(2019)は、1名の学生のみを対象としている。岩本 (2010)も4名の学生を対象としている。より多くの学生の考えを調べることで、先行研究では調査されていない要因が明らかになる可能性がある。従って、他の学生の認識を探る必要がある。英語学習意欲を取り戻すために、教員がどのような指導をするべきかに関する高校生の意見を調査しているのは Akay (2017)のみであり、日本人学生の考えは調査されていない。

IV. 本調査の目標と意義

英語学習意欲を取り戻すために、大学の英語教員がどのような指導や心構えを実践するべきだと思うか、日本人の大学生の認識を調べる。Agawa & Ueda (2013)は、英語学習意欲を取り戻したことがある学生に、「やる気を取り戻すのに大切なこと」が何だと思うかを尋ねるのが望ましいと推奨している。なぜならこの質問をすることにより、英語学習意欲低下を乗り越える効果的な方法について、新たな知見が得られるためである。従って、本調査では英語学習意欲を取り戻すために、(1)学生自身がどうすべきか、(2)大学の英語教員がどのような指導をするべきかについての学生の考えを分析する。このような学生の認識を探ることは、英語学習意欲が下がったままの学生が英語学習意欲を取り戻す方法に関して理解するのに役立つと予想される。

V. 研究方法

1. データ収集方法と対象者

2020年4月から7月にかけて、大学Tの学生に質問紙調査への参加を授業外でお願いした。質問紙を配布する前に、教員Aと教員Bの授業の終わりに英語学習意欲を取り戻したことがある学生がいるか尋ねたところ、6名の学生が挙手した。このことから、6名の学生に質問紙への回答をお願いした。その結果、同年10月に他大学の学生が質問紙に回答した。質問紙に回答した学生に、質問紙を大学Tと他大学の友人に拡散してほしいとお願いした。このうち、英語学習意欲を取り戻したことがある学生は3名いた。筆者は質問紙の拡散を依頼する際、スノーボールサンプリングの方法を用いた。その理由としては、本研究の参加者の人数が極めて限られていたことが挙げられる(Explorable.com, 2009)。

拡散された質問紙に回答した大学Tの学生のうち、英語学習意欲を取り戻したことがある学生は16名いた。その後、再度教員Iの授業を履修している学生に質問紙調査への参加を依頼した。その結果、英語学習意欲を取り戻したことがある学生は22名いた。合計で47名の学生を対象とした。このうち、1年生は1名、2年生は24名、3年生は10名および4年生は12名である。このうち、女子学生は35名、男子学生は12名いる。英文学や外国語などの英語を中心とする文系学部に所属している学生は41名おり、英語を中心としない文系学部に所属している学生は6名いる。TOEICのリスニングとリーディングのセクションで300-400点を取った学生は8名いる。400-500点を獲得した学生は15名おり、500-600点を取った学生は10名いる。600-700点を取った学生は3名おり、701点以上取った学生は6名いる。英語力が不明の学生は3名おり、英検3級を持っている学生が1名いる。英検準2級を取った学生が1名いる。

教員Iと教員Tは、大学Tで英語の教職科目を教えている。この2名の先生の授業を履修している学生に、質問紙調査への参加を依頼した。教員Iおよび教員Tとは共通の英語教育関係の学会に所属しており、自分の研究に関するアドバイスを時折もらっていた。筆者は修士課程で学んでいた際、教

いかに学生が英語学習意欲を取り戻すか：日本人学生へのアンケート調査を基に

員 T の授業を 2 度履修したことがある。修士課程を修了したのちも著者の研究に関して時折助言してもらったことがある。これらの理由により、教員 I と教員 T の授業を履修している学生を選抜した。そのため、本調査では中学校と高等学校の英語教員になるための教職科目を履修している学生が多い。

2. 質問紙の質問

質問紙の質問は、Agawa & Ueda (2013)の質問紙の内容を加筆修正したものである。最初に、学生の学年・性別・所属している学部について尋ねた。2 年以内の TOEIC のリスニングとリーディングの成績に関しても質問した。英語学習意欲を取り戻した学生にのみ、英語学習意欲を取り戻すために教員と学生がすべきことに関して尋ねた。質問紙調査の質問項目は、付録に掲載している。

3. データ分析方法

教員と学生の自由回答の質問への回答は、キーワード分類法で分析した。キーワード分類法は、質問紙調査の自由回答方式の自由記述の回答文章を分析するために開発された方法である（今、中岡、伊藤、& 佐藤, 1995）。この方法により、自由回答の文章からキーワードを抽出し、関係するキーワードの階層化を行った。最初に、自由記述文をパソコンに入力した。その後、自由記述文を要約した。要約に基づいてキーワードを抽出し、キーワードリストを作った。抽出したキーワードのラベル付けを実施し、構造化した。最後に、構造化された結果に関して集計を行った。

4. 対象者への倫理的配慮

創価大学に所属する大学院生は学内外の人に対して調査を実施する場合、人を対象とする研究倫理審査を通過しなければならない(創価大学人を対象とする研究倫理審査委員会, n.d.)。本研究では研究倫理審査が不要となる条件で調査を実施した。しかし、質問紙の項目に対象者のプライバシーや人権を侵害する質問がないか確認するために、筆者は創価大学人を対象とする研究倫理委員会の審査を受けた。対象者には調査への参加が任意であり、不利益を被らずにいつでも辞退できることが説明された。研究への参加に同意した場合にのみ、対象者は質問紙に回答した。

VI. 結果

1. 先行研究で言及されている結果

(1) 分かりやすい授業

学生 A は分かりやすい授業をする教員から教わることも必要であるという意見を持っている。

(2) 基礎的な英文法と英単語を理解する

学生 B は英語学習意欲が低い学生は、基礎的な英文法と英単語を見直すのが望ましいと考えている。

(3) 成功と悔しさを経験する

学生 O は、自分の英語が通じたという成功を経験することが重要だと述べた。学生 P は英語が聞き取れたという成功を経験すれば、英語学習意欲が戻るという考えを語った。学生 B'からは中学校と高等学校では英語の勉強に関心があり、成績が良かったという成功経験を思い出す必要があるという

意見が出た。学生 A' は英語を勉強し、勉強の量に見合った成功を経験することが必要であると認識している。学生 R は自分のコミュニケーション力が十分でないなどの悔しさを感じる経験が大切であるという意見を述べた。

(4) 英語で会話することの楽しさ

学生 Q は大学付属のスピーキングセンターのセッションに参加し、英語で会話することが必要だと考えている。学生 E は英語学習が楽しいと思える教員、授業内容ならびに環境が大事だという考えを持っている。学生 C からは、クラスでのコミュニケーション活動を中心に進めるべきという意見が出た。学生 D は他者と英語で意見交換ができるようになりたいという目標を持つのが良いと考えている。学生 H と I からは外国人の学生と英語で会話する楽しみを実感することにより、学生は英語学習意欲を取り戻せるという意見が出た。学生 J は英語母語話者の友人が近くにいるなど、英語で話したいと思う機会も重要となると考えている。学生 K からは様々な人と出会い、その人との会話を通じて好きになることが重要だという意見も寄せられた。学生 L も、大学で外国人の学生と話す機会をより多く持たなければならないと認識している。

(5) 学習目標を設定して勉強する

学生 S からは具体的な学習目標を設定すべきであるという意見が出た。学生 T は学習目標を達成できた際、自分がどう感じるのかについて考えることが重要だと考えている。学生 U は英語を使って何ができるようになるのかに関して考えることで、英語学習意欲が戻る可能性はあると述べた。学生 V は自分が決めた目標を達成している人の勉強過程や方法について知るのが良いと考えている。さらに、彼女は自分自身に「英語は将来必要であり、英語力を磨くことは自分にとってプラスになる」と言い聞かせるのが望ましいという意見も述べた。学生 Z も自分の英語力では、将来の目標を達成できないという危機感を持つことという考えを述べた。学生 W は自分に合う勉強法を見つけることも、英語学習意欲が戻ることにつながると考えている。

(6) クラスメートと励まし合うこと

学生 C' は同じ英語学習目標を持つクラスメートと激励しあうのが望ましいと考えている。学生 D' も将来の夢について友人や家族および恋人と楽しく話すのも効果的だと認識している。

(7) 海外へのあこがれ

学生 I' は海外へのあこがれを持たない限り、意欲は向上しないという考えを述べた。学生 J' は興味がある異文化について調べるのが良いと述べている。

(8) 周囲の状況を知る

学生 K' からは周囲の状況を知ることにより、自分の立ち位置を再確認するのが良いという意見が出た。

(9) 英語を使いこなす人から刺激を得る

学生 X は英語を自在に使いこなす人から刺激を得ることも重要だという意見を持っている。

2. 先行研究で言及されていない結果

(1) 学生の英語力が必ず伸びると信じて励まし続けること

学生 L' は無気力な学生が成功体験を積むことができるまで、教員はピグマリオン効果により、その学生の英語力が必ず伸びると信じて励まし続けることが大切だと述べた。

(2) 自信をつけ直す

学生 F は単語を覚えるなどの小さいことから自信をつけ直すのもよいという意見を持っている。学生 G も自分の英語力に自信を持つべきであるという意見を述べている。

VII. 考察

1. 分かりやすい授業

石田 (2021)は、大学生が英語の授業に対してどのような期待を持っているのか調べた。彼女の研究に参加した学生は分かりやすい授業とは、教員の説明と発音が理解しやすいことであると考えている。さらに、教員が最初に日本語で説明し、徐々に英語による説明の割合を増やしてほしいと学生は認識している。なぜならオールイングリッシュの授業では、説明を理解できずに戸惑う学生がいるためである。それゆえ、石田は日本語の説明から英語の説明へと移行するべきだと提案している。

学生 A は英語学習意欲を取り戻すために、分かりやすい授業をする教員から教わる必要があると述べた。グループ活動の方法を英語で説明する際、分からなかったり聞き取れなかったりした学生が理解できるよう、日本語の説明が書かれた補助教材を配布することで、学生は教員の説明が理解しやすいと感じることが予想される。さらに、グループ活動について英語で説明したのちに、学生同士で理解できなかった個所があったかを話し合わせることも可能である。なぜなら話し相手がクラスメートなら、質問することに抵抗を持ちにくいためである。クラスメートも分からない場合は、グループで教員に質問できる。これにより、学生は授業についていけるであろう。

英語母語話者の教員は日本人大学生のアシスタントを採用することも検討できる。英語母語話者の教員の英語による説明をアシスタントが日本語で説明することにより、学生は理解できるようになる。その後、アシスタントによる日本語での説明を段階的に減らせば、学生は英語のリスニングの練習ができる。分からないことがある際も、学生は日本人のアシスタントに質問できるというメリットが生じる。英語で分からないことをうまく質問できない場合のみ、日本語での質問を許可する方法であれば、学生は英語で質問する練習ができる。

英語と日本語を臨機応変に使い分け、クラスメート同士で話し合わせることにより、学生は英語学習意欲を取り戻せる可能性がある。岩本 (2010) や小湊 (2019) の調査では英語学習意欲を取り戻した要因として、学生本人の努力（例：自律学習）と周囲の働きかけ（例：友人のサポート）が挙げられている。このことから、学生は授業を理解できるよう、クラスメートに質問したり、教員の説明を集中して聞いたりする努力もするのが効果的だと予想される。

2. 基礎的な英文法と英単語を理解する

学生 B は英語学習意欲が低い学生は、基礎的な英文法と英単語を見直すことにより、英語学習意欲を取り戻せると考えている。教員は易しく丁寧に文法を日本語で説明する必要がある。阿川その他(2011)によれば、日本人の大学生が英語学習意欲低下を経験する原因として、英文法学習への抵抗感がある。それゆえ、教員は学生のこのような心理を理解し、基礎的な文法と単語をスピーキングやライティング活動で使う練習をさせることができる。これにより、文法と単語の理解を深めやすくなる。

3. 成功と悔しさを経験する

複数の学生が英語学習意欲を取り戻すためには、成功を経験することが必要だという考えを持っている。岩本(2010)の調査に参加した学生は英語学習意欲低下を経験しても、英語学習が楽しいと思える機会を積極的に創出しようとしていた。成功を経験するには、失敗から学んで乗り越えることが重要である。学生は失敗を恐れるのではなく、失敗から学ぶ姿勢を持つ必要がある。自分の英語力は努力次第で時間をかけて伸ばせると信じ、失敗を英語力向上のチャンスと捉えることができるかどうかである。教員は学生が失敗を成長の機会と思えるよう、授業で訓練させることもできる。ワークシートに「言いたいことをうまく英語で言えない」などの項目を含め、学生にどうすればこれらのことができるようになるか考えさせる工夫をするのが良かろう。加えて、話し合いで出た意見(例：言いたいことを英語で言えるよう、前もって英語の原稿を準備して練習する)を授業中の活動で実践することにより、学生は成功を体験できる。教員が話し合いで出た意見を学生に共有すれば、学生は失敗を乗り越える様々な方法について知ることができる。また、教員が英語学習意欲の下がった学生と英語学習意欲を取り戻した経験がある学生を同じグループに割り振り、英語学習意欲低下から回復のプロセスに関して話し合わせるができる。英語学習意欲が低下した学生は自分に適した方法を知る機会が得られる。

学生は英語を学習する際、成功と悔しさの両方を経験する。小湊(2019)の調査に参加した学生 A は、最初は失敗を過度に恐れていた。しかし、英語の授業を再履修した際、友人の学生 B は彼女に英語学習に関するアドバイスを出した。学生 B は彼女が英語の授業で難しさを感じた際も、サポートした。なお、学生 B は彼女が英語の授業の内容が理解できなくても、非難しなかった。その結果、学生 A は失敗を恐れなくなった。教員は学生が英語の勉強で難しさに直面しても、気軽にクラスメートに質問できる教室環境を整えるべきである。教員は学生に間違いを恐れず、自分の考えを発信することに集中するように助言する必要がある。

学生 R は自分のコミュニケーション力が十分でないなどの悔しさを感じる経験が大切であるという意見を述べた。三ツ木(2020)の調査に参加した学生は、自分の英語を分かってもらえないという現実に対し、英語力を磨いて見返したいと感じた。それゆえ、このような悔しさを経験することが必要である。英語で話す練習を重ねる中で、自分の英語が通じなかったという悔しさを経験することが重要となる。なぜならこれにより、英語力を高めて自分の英語が通じるようにしたいと思えるためであ

る。しかし、失敗しても悔しさを感じない人もいる。悔しさを感じない人の特徴として、次の2つが挙げられる：(a) 目標に向けて努力するのが面倒だと思う、(b) 自分で決めた目標を達成した経験が少ない（浮世,2013）。阿川その他(2011)も、日本人大学生は英語に限らず努力をするのが不得意だと明らかにしている。

(a) と (b) のタイプの学生への対策として、次のような方法を提案する。「春学期を終えた後の自分」について考えてもらうことができる。春学期の最初の授業で、春学期が終了するときまでに英語を使って何ができるようになりたいか考えてもらう。趣味や興味があることと関係した目標も書いてよい。教員は学生が思いついたことをクラスメートと共有させ、目標達成のスピードを競わせることもできる。同じ目標を持つ学生同士が競うことで、意欲が上がる。達成した目標の数が多い人を勝者とし、勝者の成績評価に加点することもできる。負けた場合にも、どのようにすれば次に勝利できるか考える機会を設ける工夫も欠かせない。次に勝利するためにすべきことをクラスメートと話し合わせることで、学生は様々な方法を取り入れることができる。

4. 学習目標を設定して関心があることを英語で勉強する

何名かの学生から、学習目標を持つことが欠かせないという意見が寄せられた。目標を決め、目標を達成した人の経験談を読むのは刺激になる。なぜなら体験談を読むことで、どのように目標を達成しているか知ることができるためである。神奈川大学のホームページには、数名の学生の英語学習体験談が掲載されている（神奈川大学, n.d.）。神奈川大学の学生は夏季休暇中に英語の集中講座を受講したり、イングリッシュキャンプに参加したりすることで、英語力が上がった。学生は自分に合う目標の達成方法を探すことができる。そのため、関心を持っていることに関する学習目標を設定する方法も選べる。例えば「好きなノベルゲームの言語を英語に設定してなるべく毎日プレイし、語彙力を高める」などの目標を決めれば、英語学習を継続しやすくなる。頻繁に同じ単語を読むことにより、単語を覚えやすくなる。語彙力が高まることで、英語で会話する速度も上げられる。

学生 W は自分に合う勉強法を見つけることも、英語学習意欲が戻ることにつながると考えている。吉田(2012)は、日本で英語学習に成功した学生の勉強のプロセスを分析した。英語学習に成功した 2 名の大学生（ケンとアキコ）にインタビューを 2 度実施した。ケンとアキコ（いずれも仮名）は、映画やドラマで英語を勉強した。気に入ったセリフを何度も観て、使用される単語を習得した。なお、彼らは英語での対人コミュニケーションで蓄積した知識をアウトプットした。その後、会話で得たフィードバックをインプットした。彼らは英語で会話できる場所を自ら訪問し、1 日 3 時間英語に触れる時間も作った。英語学習意欲が低下した学生は、自分の好きなことを英語と関連付けることができる。従って、このような学生は好きなことと関連付けて英語を学習することで、英語学習意欲を取り戻せるであろう。

5. クラスメートと励まし合うこと

学生 C' は同じ英語学習目標を持つクラスメートと激励しあうのが望ましいと考えている。学生 D' も将来の夢について友人や家族および恋人と楽しく話すのも効果的だと認識している。先行研究によると、学習意欲の高い他者がいることと友人からの良い影響により、英語学習意欲を取り戻した事例が複数ある(Carpenter et al, 2009; 三ツ木, 2019)。他者から受けた刺激とクラスメートの激励も要因となっている (Song & Kim, 2017; 三ツ木, 2020)。小湊 (2019)の研究結果からも、支えてくれる友人の存在が英語学習意欲の回復につながったことが分かる。英語学習意欲が低下している学生は、友人や英語学習意欲が高いクラスメートと話し合う機会を持つ必要がある。教員は英語学習意欲を取り戻したことがある学生と現在も英語学習意欲が下がったままの学生を、グループディスカッションの際に同じグループに振り分けることができる。友人や英語学習意欲の高いクラスメートがどのような要因で英語学習意欲低下を経験し、その後どのように英語学習意欲を回復させたのか知ることで、自分も努力次第で英語力が上がるかもしれないと覚悟することが欠かせない。

6. 異文化への憧れ

質問紙調査を実施した結果、学生が関心を持っているものとして、異文化という意見が寄せられた。Song & Kim (2017)の調査に参加した韓国人の高校生は、英語圏の文化に関心を持ったことにより、英語学習意欲が回復した。生徒は英語圏の文化に係る活動（英語の流行歌を聞いたり、英語の映画を見たりする活動）に参加したことで、英語学習に対する関心が高まった。文化に興味を持っている学生に関しては、興味がある国を選ばせてその国の文化について英語で調べさせることができる。授業の宿題として外国人の学生とインタビューし、調べたことを外国人の学生に質問することで、学生は英語が情報を引き出すのに役立つツールだと理解できる。これにより、英語学習意欲を取り戻せると予想される。文化に関心がない学生は、関心を持てることに関して英語で調べ、英語で調べたことを発表できる。興味があることについて英語で言いたいことをうまく言えたという経験により、英語学習意欲を取り戻せる。発表が成功しなかった場合は、教員が足りていなかったこととどうすれば次にうまくいくかを話し合わせる活動を導入する。学生はこの活動で悔しさを感じ、次に成功したいと思える可能性がある。

7. 周囲の状況を知る

前川 (2018)によると、岡山理科大学の学生は周囲（親や教員、社会）の圧力により、英語の重要性や意義を認識し、勉強に取り組んでいる様子であった。この知見は岡山理科大学以外の大学の学生にも該当する可能性がある。学生はなぜ英語を学ぶ必要があるのか理解しなければならない。さらに、英語を勉強しなかった場合に生じるデメリットも理解する必要がある。日本では少子高齢化が加速しており、日本社会の担い手は国外からの人材確保で補充される（ベネッセ教育情報サイト, 2020）。国内で仕事をする場合にも、英語で対応できなければ伝達ミスや時間のロスが発生する。日本企業にとって社員の英語力を高めることは、新規顧客の獲得や拠点拡大および企業の海外進出など、ビジネ

いかに学生が英語学習意欲を取り戻すか：日本人学生へのアンケート調査を基に

スチャンスを得る機会になる。それゆえ、国内の企業においても英語力の向上が欠かせなくなる(鈴木,2019)。グローバル化していない企業であっても、英語を使うようになる可能性がある。教員はこれらの情報を学生に分かりやすく説明する必要がある。日本社会でなぜ英語力が求められているのか理解すれば、英語学習意欲を取り戻せる可能性がある。外国人の学生を英語の授業に招待し、数名の日本人学生と1名の外国人学生が話し合っ何かを決める活動も効果的であろう。英語でコミュニケーションを取る難しさを経験し、練習も重ねる必要がある。春学期に2度、秋学期に2度外国人学生を授業に招き、それ以外の授業では日本人学生同士で練習できる。将来就職した際に困らないようにするためであれば、学生は意欲的に英語を勉強しやすくなる。

8. 英語を使いこなす人から刺激を得る

学生からは、英語が使える人に刺激されることが重要だという意見が出た。三ツ木(2019)の調査に参加した1名の学生は、他者から受けた刺激によって英語学習意欲を取り戻した。中国系カナダ人の児童が英語と中国語を流暢に使う場面に遭遇したことが理由となった。なぜなら、自分と同じアジア人で年下の児童が2つの言語で流暢に話す姿に感動したためである。このことから、英語が使いこなせる人を見て、刺激されることが英語学習意欲回復のきっかけになる。英語の授業で英語が使いこなせる人を授業に招き、学生と話し合う機会を設ける方法がある。このような人と英語で話す楽しさを経験して刺激されることにより、自分の英語力を高めたいと感じられる可能性がある。これにより、英語学習意欲を取り戻せるであろう。

9. 先行研究で言及されていない結果

(1) 学生の英語力が必ず伸びると信じて励まし続けること

学生 L' は無気力な学生が成功体験を積むことができるまで、教員はピグマリオン効果により、その学生の英語力が必ず伸びると信じて励まし続けることが大切だと述べた。Li & Rubie-Davies (2017) は、ピグマリオン効果(教員がクラス全体の学習者に対して持つ期待)が中国人大学生の英語力に及ぼす影響を調べた。大学1年生を対象に調査した結果、教員の期待は学生の1年後の英語の成績に多大な影響をもたらしたことが判明した。この結果が日本人大学生にも当てはまる可能性はある。そのため、教員が学生に対し高い期待を持ち続けることにより、学生の英語力に加えて英語学習意欲も高まる可能性はある。学生の英語学習意欲や英語力が不十分である場合も、教員は学生に高い期待を持って励まし続ける努力をする必要がある。

(2) 自信をつけ直す

学生 F は単語を覚えるなどの小さいことから自信をつけ直すのもよいという意見を持っている。学生 G も自分の英語力に自信を持つべきであるという意見を述べている。多くの学生が自分の英語力に自信を持っていないことは、複数の研究で明らかにされている(藤田, 2020; 石田, 2021)。中学校・高等学校で学ぶ単語と語彙の基礎力の強化を図ることで、学生の自己肯定感が高まる(藤田, 2020)。さらに、学習者に自分ができることを意識させ、自らの自尊心を高めるタスクが必要である。岩本(2010)

は学生に自分ができることを意識させ、自分たちの自尊心を高めるタスクが必要だと述べた。自信は目標を達成するための自分の能力を信じることである。自信は、自己効力感に比べて持ちやすい。Legere (2020)は自信を持つことで、自己効力感が高まる可能性はあると述べている。趣味と関連付けて英単語の学習を進めるのもよい。趣味と関連付けて勉強することで、学生の英語力が向上する可能性はある。その結果、英語学習意欲が回復することもありうる。

VIII. 終わりに

本調査では英語学習意欲を取り戻したことがある学生に、英語学習意欲を取り戻すために(1)学生がどうすべきかと(2)大学の英語の教員はどのような指導をするべきかに関して質問紙で尋ねた。先行研究で明らかにされていない結果として、大学の英語の教員は学生の英語力が必ず伸びると信じるべきだという学生の意見が挙げられる。小さなことから自分の英語力に自信をつけ直すことが重要だという意見も寄せられた。今後は学生に質問紙調査を実施し、学生が英語学習意欲低下を経験した原因と、英語学習意欲を取り戻した理由に関連があるか調べる予定である。

引用文献

- Agawa, T., & Ueda, M. (2013). How Japanese students perceive demotivation toward English study and overcome such feelings. *JACET Journal*(56), 1-18.
- Akay, C. (2017). Turkish high school students' English demotivation and their seeking for remotivation: A mixed method research. *English Language Teaching*, 10(8), 107-122.
- Carpenter, C., Falout, J., Fukuda, T., Trovela, M., & Murphey, T. (2009). Helping students repack for remotivation and agency. In A. Stoke (Ed.), *JALT 2008 Conference*. Tokyo: JALT.
- Explorable.com. (2009, April 24). Snowball Sampling. Retrieved June 11, 2020, from Explorable.com: <https://explorable.com/snowball-sampling>
- Falout, J. (2012). Coping with demotivation: EFL learners' remotivation processes. *TESL-EJ*, 16(3), 1-29.
- Han, T., Takkaç-Tulgar, A., & Aybirdi, N. (2019). Factors causing demotivation in EFL learning process and the strategies used by Turkish EFL learners to overcome their demotivation. *Advances in Language and Literary Studies*, 10(2), 56-65.
- Jung, S. (2011). Demotivating and remotivating factors in learning English: A case of low level college students. *English Teaching*, 66(2), 47-72.
- Kikuchi, K. (2015). *Demotivation in second language acquisition: Insights from Japan*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

- Kim, T. Y., & Kim, M. (2017). Demotivators and remotivation strategies in L2 learning: A case study of Korean EFL students. *Foreign Languages Education*, 24(2), 45–74.
- Legere, C. (2020, September 24). What's the difference between self-esteem and self-confidence? Retrieved June 5, 2021, from <https://www.torontopsychologists.com>
- Li, Z., & Rubie-Davies, C. (2017). Teachers matter: Expectancy effects in Chinese university English-as-a-foreign-language classrooms. *Studies in Higher Education*, 42, 2042-2060.
- Sakai, H., & Kikuchi, K. (2009). An analysis of demotivators in the EFL classroom. *System*, 37(1), 57-69.
- Song, B., & Kim, T. Y. (2017). The dynamics of demotivation and remotivation among Korean high school EFL students. *System*, 65, 90-103.
- 阿川敏恵、阿部恵美佳、石塚美佳、植田麻実、奥田祥子、カレイラ順子、…清水順. (2011). 「大学生の英語学習における動機減退要因の予備調査」. 『The Language Teacher』, 35(1), 11-16.
- 石田知美. (2021). 「大学新入生に対する英語アンケート調査分析 ―学生はいつ英語が苦手になったのか―」. 『日本福祉大学全学教育センター紀要』, (9), 25-31.
- 岩本尚希. (2010). 「外国語学習者の学習継続要因に関する一考察--言語学習ヒストリーから」. 『桜美林言語教育論叢』, (6), 29-43.
- 浮世満理子. (2013). 「行き当たりばったり」の人の行動心理学[挫折タイプ別処方箋]. 参照日：2021年7月9日、参照先：<https://president.jp/articles/-/11158?page=7>
- 神奈川大学. (n.d.). 外国語学習体験談. 参照日：2021年2月1日、参照先：<https://www.kanagawa-u.ac.jp>
- 小湊彩子. (2019). 「学習意欲を喪失した英語の苦手な学生はどのようにして意欲を取り戻したのか：動機づけプロセスに関する質的研究」. 『関東甲信越英語教育学会誌』, 33, 1-12.
- 小湊彩子. (2021). 「英語リメディアル教育を必要とする学生に適した文法指導を目指して：「語順」を活用した実践報告」. 『リメディアル教育研究』, 15, 83-90.
- 今尚之, 中岡良司, 伊藤昌勝, & 佐藤馨一. (1995). 「KW 分類法を用いた自由記述文データベースによる意識分析手法」. 『土木情報システム論文集』, 4, 1-8.
- 鈴木. (2019). 日本企業に英語力が求められる理由. 参照日：2021年8月29日、参照先：https://nativecamp.net/corporate-blog/20190810_reason/
- 創価大学人を対象とする研究倫理審査委員会. (n.d.). 創価大学人を対象とする研究倫理規程. 参照日：2021年6月24日、参照先：<https://www.soka.ac.jp>
- 藤田恵里子. (2020). 「非英語専攻学習者の英語学習に対する意識調査」. 『江戸川大学紀要』, (30), 507-515.

ベネッセ教育情報サイト. (2020). 少子高齢化で英語が必要に？グローバル社会を目指す日本の未来とは. 参照日：2021年7月10日、参照先：<https://benesse.jp/kyouiku/202011/20201105-3.html>

前川洋子. (2018). 「岡山理科大学学生の英語学習に対する意識傾向」. 『岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学』, (54), 53-63.

三ツ木真実. (2019). 「経験の語りと時間的経過から捉える英語学習動機の変容」. 『北海道英語教育学会紀要』, 18, 35-49.

三ツ木真実. (2020). 「質的分析を通じた英語学習動機の減退・回復プロセス可視化の試み：PAC分析とTEAを用いた分析」. 『JACET北海道支部紀要』, (16), 82-106.

吉田ひとみ. (2012). 「英語学習成功者のストーリーからみる学習方略と学習動機」. 『アスフォデル』, 47, 126-146.

付録：質問紙の質問内容

この調査の目標は、学生が英語学習意欲を取り戻すために必要なことについての皆さんの意見を分析することです。所要時間は15分以内です。氏名の記入は不要です。

1. あなたの学年として該当するものを、以下から選択してください。
 - ① 1年生
 - ② 2年生
 - ③ 3年生
 - ④ 4年生
 - ⑤ 大学院生
2. あなたの性別として当てはまるものを選んでください。
 - ① 男
 - ② 女
 - ③ その他
3. あなたが所属している学部として当てはまるものを選択してください。
 - ① 英文学・外国語・国際学部など（英語を中心とする文系学部）
 - ② ①以外の文系学部
 - ③ 理系学部
 - ④ その他
4. あなたの2年以内のTOEICの成績として該当するものを選んでください。
 - ① 300点以下
 - ② 301-400

いかに学生が英語学習意欲を取り戻すか：日本人学生へのアンケート調査を基に

- ③ 401-500
 - ④ 501-600
 - ⑤ 601-700
 - ⑥ 701 点以上
 - ⑦ TOEIC を最近受験していない
5. 4.の質問で「TOEIC を最近受験していない」と答えた方は、英検や TOEFL の成績をご記入ください。
6. 英語学習意欲を取り戻すために、学生がすべきことが何だと思うかご記入ください。
7. 学生が英語学習意欲を取り戻すために、大学の教員はどのような指導をするべきだと思うかご記入ください。

ご回答いただき、大変ありがとうございました。